

中世六十六部聖の奉納経筒について

田 代 孝

- 1 はじめに
- 2 山梨の経筒奉納の遺跡
- 3 社寺奉納経筒と埋納経筒

1 はじめに

中世に出現した六十六部聖は、法華経を六十六部書写し、これを国ごとに一部ずつ納経して回る者である。そして、諸国を回国して法華経信仰を勧める聖であることから回国聖とも呼ばれている。16世紀に入ると六十六部聖による納経は、経典を小形の経筒に納めて、各地の社寺へ奉納したり、塚を築いて埋納したりすることが盛行する。これらの規格化された小形経筒の発見地は、全国的には110数カ所、300点余が知られている。山梨県内においては、大六塚（上条東割経塚）・上蔵原経塚・塔の越経塚・円楽寺経筒の4カ所が確認されている。それぞれすでに報告されているところであるが、その後一部の資料が長く不明となっていた。最近になって幸いにも資料の所在が判明し、その資料化が可能となった。ここに再報告を行うと共に、中世の経塚について若干の検討を試みたい。

2 山梨の経筒奉納の遺跡

①大六塚（上条東割経塚）韮崎市大草町上条東割

大草公民館（旧大草小学校）の東方100メートルほどの大六塚で、六十六部聖の経筒が発掘されたのは、明治20年～26年（1887～93）頃と伝えられている。高橋健自による「経筒沿革考」（『考古界』第六篇八号 1907）の中で、大草村で発見された永正18年（1521）在銘の経筒として、山中笑・和田千吉らの報告と付記され紹介されている。なお、大永元年（1521）・大永3年（1523）在銘経筒が出土したというが、それについては触れられていない。「経筒沿革考」は、和田による銘文が示されているが、3文字ほど不明となっている。その後、木崎愛吉『大日本金石史3』大正10年（1921）、石田茂作「経塚」昭和4年（1929）などに取り上げられた。関秀夫氏の『経塚遺文』（1985）の中で、佐藤八郎氏教示の拓影にあった付記が紹介されている。「経筒 丈ケ四寸壺分 差渡シ壺寸六分フタ径壺寸六分 銅ニテ金メッキ他、中ニ経トモ覚シキモノノ腐蝕シタルモノアレドモ今ハ散乱シテ無シ、実物ハ同組野口英信氏所持也」とあり、経筒の高さが約13.5センチ、円筒形で銅板製鍍金である。銘文は次のとおりである。

本願 甲辰甘梨庄住聖願興 十羅刹女 爲師長父母敬白 奉納大乘妙典六十六部内 十方旦那結縁 三十番神 永正十八年天辛巳今月日

現在、大六塚はその痕跡を認めることはできない。さらに、永正18年在銘の経筒も所在が不明であったが、昭和61年（1986）に下関市立長府博物館所蔵になっていたことが判明した。平

成5年(1993)に山梨県立考古博物館の「山梨の経塚」展に出品された。

②上蔵原経塚 北巨摩郡高根町蔵原

蔵原は八ヶ岳南麓南端部の尾根台地に位置し、集落は上蔵原・中蔵原・下蔵原がある。上蔵原の中村芳夫氏宅に隣接する山林内で、昭和33年(1958)4月、中村三郎氏が中村一男氏に依頼されて開墾したところ、盛土を崩した時に天文21年(1552)在銘の経筒を発見している。発見された経筒および伴出した銭貨12枚については、赤星直忠・山本寿々雄両氏によって報告されている¹⁾。報告によれば、経筒は金銅経筒で高さ9.84センチ、経蓋は4.65センチ、筒の径4.5センチであるという。円筒形全体の拓影を載せている。拓影の銘文は次のとおりである。

十羅刹女」甲召住呂中村」奉納大乘妙典六十六部聖」三十番神」天文二十一年今月」

以後、上蔵原経塚については赤星、山本両氏の報告が基本となってきた。関秀雄氏²⁾や田代³⁾が用いたのがそれである。

1985年田代の踏査したところ、中村氏宅の西側に南北に走る尾根があり、その一角に経塚があったとされるが、その痕跡は認められなかった。また、経筒、銭貨の所在も不明であった。なお、経塚の存在した近くにも東西と南北にL字状にのびた土塁がみられた。これについては、『山梨県の中世城館跡』(山梨県教育委員会1986)の中で、上蔵原の土塁跡として報告されており、中世末期の土豪層との関係が指摘され、注目されるところである。

さらに、経塚とはわずかな位置に中村家の旧墓地があり、宝篋印塔、五輪塔、石祀などが見られる。宝篋印塔の一基には次のような銘文が刻まれている。

意趣者」逆修功德主」授林道傳信男」現世安穩後世」善處子孫繁昌」□苦受樂者也」永祿十二年三月時正」

また、五輪塔の一基にも永祿12年(1569)在銘で授林道傳の名が見える。いずれも永祿12年の春に供養された逆修塔である。授林道傳については、『武田家過去帳』から逸見蔵原中村右近丞であることが知られる。弘治2年(1556)4月21日と永祿7年(1564)3月21日に見える。

1994年長期にわたって不明であった経筒と銭貨の所在が判明した。中村芳夫氏宅において実見する機会を得て実測などを行うことができた。銅板製鍍金の経筒は保存状況も良好であった。蓋は無鈕の被蓋式盛蓋である。蓋と筒身内側に紙本経の残片が付着しているのが認められた。銭貨については11枚であった。

③塔の越経塚 北巨摩郡双葉町下今井

中央線の塩崎駅から東方約500メートル、台地山林中の西南斜面にある。経塚の形状がある程度残されている例である。飯島進氏⁴⁾や三宅敏之氏⁵⁾によって紹介されている。三宅氏によれば、遺構については「大半破壊されているが、雑木林の中に封土の一部や割石が残存しており、それから察すると、経約3メートル、高さは斜面の低い方から測って約1.5メートル、高い方では約50センチ内外になる円形封土を築き、その上を20～30センチの石で葺いた塚であった。」と報告されている。

出土品については、永祿4年(1561)在銘経筒と当年(16世紀)在銘経筒、銭貨138枚、紙本経の残片などである。経筒は円筒形が高さ10センチで銅板製鍍金である。一部分を欠損して

おり、銘文で不明の部分がある。銘文は次のとおりである。

十羅刹女」撰津国之住清覚」奉納大□□□六□六部□」三十番神」永祿²⁶年今月吉□」

六角宝幢形の高さは13.3センチで銅板製鍍金である。銘文は次のとおりである。

十羅刹女」肥前国住照白」奉納大乘妙典六十六部聖」三十番神」当年今月吉日」

④円楽寺経筒 東八代郡中道町右左口

真言宗智山派の七覚山円楽寺は、金剛智院善勝坊ともいい五社権現の別当寺であった。役小角の開創寺伝があり、延慶2年(1309)の胎内銘のある役行者像が安置されている。開創後の展開は未詳であるが、中世の文献に寺名が散見される。『廻国雑記』文明19年(1487)2月条には、本山派修験聖護院道興が当宿し、観桜の宴を催したことが見え、『王代記』永正13年(1516)9月8日には、駿河今川勢の侵入によって堂宇が焼亡したとある。また、永祿2年(1559)9月、武田信玄から善勝坊の坊領が安堵されたことが「円楽寺文書」(『甲州古文書』)から知られる。さらに、「八幡神社文書」(『甲州古文書』)永祿4年(1561)の武田氏番帳に見える42番の「七かくの欄宜」である。

武田氏滅亡後は、徳川氏から寺領を安堵され、文化年間(1804～17)には御朱印寺領29石5斗余で境内1万2062坪及び山林を相伝している。明治11年(1878)堂宇を焼失したが、大正6年(1917)に本堂が再建された。また、五社権現は明治の神仏分離政策により五社神社となる。1985年円楽寺住職の北守順真氏より、伝世されていた小形経筒を拝見する機会を得た。元龜2年(1571)在銘の経筒は、六角宝幢形経筒で、銅板製鍍金である。高さ14.3センチであり、3面に次のとおり銘文が刻まれている。

十羅刹女」下総住人圓金坊」奉納経王六十六部」三十番神」元龜二年今月日」

なお、経筒の内部に偏平五輪塔形泥塔が納められていた。高さは8.5センチであり、両面には型押による5つの梵字が各輪に配されている。これらの経筒と泥塔については、すでに田代⁶⁾が報告したところである。

円楽寺と伝世経筒との関係を知ることができるものとして、文化年間の『甲斐国志』仏寺部に円楽寺の六角堂について注目される記述がある。「行者堂ノ北ニ在リ回国修行ノ者納経所ナリ納経ノ式慶長三年ノ記アリ堂内ニ回国者所元祖頼朝坊ノ石塔婆ヲ安ズ頼朝ノ事稗説アリ今略シテ不記」とあり、六角堂が回国納経所であったことが理解される。現在、六角堂は円楽寺から南西約500メートルの五社神社裏手の山頂にある。明治26年(1893)に再建された六角堂も倒壊し、六角形の基壇とその中央に宝篋印塔を残すのみである。-

3 社寺奉納経筒と埋納経筒

山梨の中世経塚4例について見てきた。納経にあたって、大六塚・上蔵原経塚・塔の越経塚のように塚を築き、小形経筒に経典を納めて埋納する例と、円楽寺経筒のように社寺へ経筒を直接奉納する例が知られた。これらの異なる納経のあり方について検討を行ってみたい。

六十六部聖の活動は、本来1国に1カ所、全国66カ国を回国するとされているが、その巡拝路はある程度一定の社寺が決まっていたとも考えられるのである。下総国の圓金坊が元龜2年

(1571) 在銘の経筒を奉納した円楽寺は、中世における甲斐国の納経所であったことが知られる。文化11年(1814)完成の『甲斐国志』は、円楽寺が「回国修行ノ者納経所」であり、慶長3年(1598)の納経の式に関する記録があることを伝えている。

近世において円楽寺が回国納経の巡拝路の1カ所であったことは、天野信景の『塩尻』に収められた「六十六部聖順拝路」によってもそのことが知られる。宝永4年(1707)に東武の旭誉が刊行したものであり、1国1社寺で66カ国を載せており、その中に「甲州七覚山」とある。同じく18世紀前半頃の刊行と考えられるものに、下野国河内郡新里村の念西の『廻国六十六部縁起』があり、その中に「かひの国しちかくさん」と見られる。なお、『塩尻』の巡拝路とは20カ所が別の社寺であり、回国の聖によって巡拝路が異なることも知られる。

さらに、山梨県東八代郡中道町右左口の千野満平氏宅には、正徳3年(1713)から享保3年(1718)にかけて、千野忠右衛門が六十六部の回国を実行したおりの納経請取状164通が残されている。甲斐国では「甲州山梨郡浄土教寺」「甲州七覚山大権現宮円楽寺」「甲斐国一宮浅間神社」「甲州国分寺」を巡拝している。忠右衛門の納経社寺の中で、『塩尻』所収の社寺と一致するのは43カ所ある。忠右衛門の納経は、多くが1国に数カ所であり、有名な霊場をできるだけ回っているといえよう。『塩尻』には「秩父板東一百番、八十八箇所より、西国三十三所、四国遍路四十八箇所二、六十六部を一ツにして、回るもの多し」とあるように、忠右衛門も大願成就のためにより多くの社寺に立寄ったのである。忠右衛門の5年におよぶ回国納経の動機の1つに、地元にある回国納経所としての七覚山円楽寺が大きく影響していたことであろう。

『甲斐国志』、『塩尻』、『廻国六十六部縁起』、『千野家納経帳』などから、近世において回国納経所であった円楽寺を見てきた。円楽寺に奉納された元亀2年在銘の中世の経筒に関わって、大分県の『余瀬家文書』がある。文書の1通に16世紀後半とされる「六十六部奉納札所覚書」があり、その中に「甲斐 横根 七覚寺」と見える。甲斐国に2カ所の奉納所が存在したことが知られる。「横根」は甲府市横根町の岩泉山光福寺とされる。光福寺は「寺記」によれば、後三年の役(1083～87)後、源義光が空源を開山として真言宗の寂靜院を建立したのが初めという。鎌倉時代には横根寺と俗称されていたが、南北朝期の応安5年(1372)の山崩れで荒廃していたのを、天文16年(1547)武田信玄が浄土宗寺院光福寺として再興したといわれている。江戸時代は上の堂に行基作と伝える十一面観音、下の堂には空海作と伝える聖観音が安置され、横根穴観音と呼ばれていた。横根(光福寺)が回国納経所として見えるのは、『余瀬家文書』のみである。光福寺の回国納経所としての性格は近世にはいつてから弱まり、地域的な観音霊場として発展したのであろうか。七覚山円楽寺が近世はもとより中世まで遡って、六十六部聖による回国納経所であったことが文献によって知られた。元亀2年の奉納経筒の存在はそのことを示しているといえよう。

先にもふれたように、中世の小形経筒の発見地は110数カ所であるが、そのうち六十六部聖による奉納経筒の発見場所は少ない。『余瀬家文書』に見える社寺にあてると、甲斐国の七覚寺、下野国の日光山、加賀国の白山、越中国の立山、出雲国の大社の5カ所である。『塩尻』では『余瀬家文書』の5カ所に、岩見国の八幡が加えられる。66カ所の霊場に対して6カ所に

過ぎない。六十六部聖の一般的な巡拝路となっている社寺との差はさわめて大きい。この開きについては、かつて66カ所の全てに経筒が奉納されたものが、次第に失われてしまった結果を示しているのであろうか。岩見国八幡（島根県大田市南八幡宮）の六角堂内に鉄塔があり、この鉄塔内から経筒168点、銅製納札7枚、その他泥塔、経石懸仏、銭貨などが発見されている。この保存状態が恵まれていた例などから、巡拝社寺の全てに経筒を奉納したとは考えにくく、回国納経に際しての方法の違いをうかがうことができるのである。経筒の奉納以外に、南八幡宮の鉄塔内にあった納札の奉納や、写経のみを奉納した場合も考えられるのである。

次に塚を築いて経筒を埋納した例である。大六塚、上蔵原経塚、塔の越経塚の3例は、北巨摩地方に分布し、先に見たように六十六部聖の巡拝路とは直接に関連するとは考えられない場所である。それぞれの経塚の立地は村中の辻や墓地の近くや山林などであるが、かつては地域的な霊地であったことも考えられるが、明らかではない。

塔の越経塚の永祿4年在銘経筒には、摂津国の清覚という聖の名があり、当年在銘経筒には、肥前国の照白という聖の名がある。1基の経塚から2点の経筒が出土し、しかも回国聖の出身地が異なることは注目されることである。各国を巡って甲斐国にやってきた清覚や照白は、円楽寺に納経を済ませた後、各地で法華経信仰を勧めていたところ、双葉町下今井の地において、地元の有力者の依頼に応じて経塚を共同で営んだのであろうか。

大六塚は韮崎市大草町上条東割に所在したが、この地は甘利荘と呼ばれる地域であり、そのことは永正18年在銘経筒の「甲苧甘梨庄」とあることによっても知られる。大六塚の造営は、甘利の住人で六十六部聖の願興が関与している。また、上蔵原経塚は高根町蔵原に所在し、天文21年在銘経筒が出土しているが、その銘文に「甲苧住呂中村」と見える。経塚造営にあたって甲斐国の住人である六十六部聖の中村が関わっていることが知られる。これらのことから六十六部聖の活動が、日頃は地元や国内にその中心があり、時々依頼で諸国を回国したと考えられるのである。

甲斐国の六十六部聖が回国を行っていたことは、現在までに各地で発見された経筒から知ることができる。島根県の大田南八幡宮の鉄塔内の経筒は、永正18年(1521)、大永5年(1525)、大永7年(1527)、天文5年(1536)の紀年銘のあるものが5点と年不詳が1点である。それぞれ「甲苧巨麻郡甘梨庄」、「甲苧巨摩郡加賀美」、「甲苧府中」、「甲苧」、「甲苧」、「甲州黒國」とあり、国だけのものから郡や村まで明確なものもある。和歌山県那智山経塚の大永2年(1522)在銘経筒は、奉納者は「甲苧甘梨庄」の聖で、依頼者は「駿州府中鳥坂」の又四郎定重である。茨城県嘉良寿里経塚の大永3年(1523)在銘経筒には「甲苧高家」とあり、福島県下上野経塚の年不詳の経筒には「甲苧」とある。東京都成瀬経塚の年不詳の経筒にも「甲州」と見える。これらのことから、甲斐国の六十六部聖も東国や西国の霊場はもとより、きめ細かく各地をめぐるということが知られるのである。

なお、上蔵原経塚の造営者についてふれておきたい。戦国期の蔵原の一帯は武田家臣団のうち、辺境武士団として編成された津金衆に関わる地域である。津金衆は津金氏のほか小尾、比志、小池、箕輪、八巻などの諸氏からなっていた。蔵原は南北に走る尾根を1つ挟んで小池と

隣りあう位置にある。蔵原地区でも最も北に位置するのが上蔵原であり、その一角に所在した上蔵原経塚は、先に紹介したように土塁跡や中村家旧墓地との関係から中世土豪層との関わりが考えられるのである。

中村家旧墓地の永祿12年（1569）の宝篋印塔にある「授林道傳」が、『武田家過去帳』の中に「逸見蔵原中村右近丞 授林道傳禪門 逆修 弘治二年四月廿一日」とあり、さらに、「甲州邊見蔵原中村右近丞内方 榮富妙繁信女 逆修 永祿七年甲子三月廿一日」とあることから、宝篋印塔が中村右近丞の逆修塔であることが知られる。

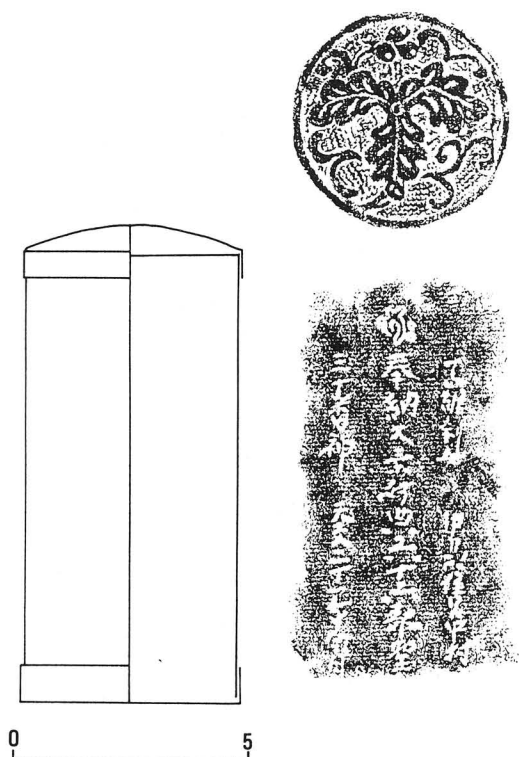
このことから上蔵原経塚は、津金衆の小池党に関わる有力な人物か、ないし蔵原にあって小池氏にも相当する有力な人物であったと思われる中村右近丞によって、その屋敷地内の一角と考えられる場所に営まれたのであろう。その造営に六十六部聖として関与したのが「甲州住侶中村」である。この聖については中村右近丞の縁者の可能性を考えておきたい。

以上、16世紀後半の六十六部聖の経筒を用いた納経について、社寺へ奉納した例と、塚を築いて埋納した例とに分けて若干の検討を行ってみたところである。16世紀後半は戦国期の動乱の社会であるが、六十六部聖の活動はきわめて広範囲で多様な面を持っていたことが知られた。法華経信仰を勧める六十六部聖は、日常にはその出身地域および国内にあって活動を行い、また、積極的な勧誘を行ったであろうが、依頼を受けて回国納経へと出ていったのである。

六十六部聖が背負う笈の中には、金色に輝く小形経筒をはじめ、納札や写経の道具が収められていたことであろう。諸国の巡拝地においては納経の方法も使い分けていたことが考えられるのである。中世における一定の巡拝路を中心としながらも、各地においても、求めに応じて納経の1つの方法として、経塚造営も行ったのである。

註

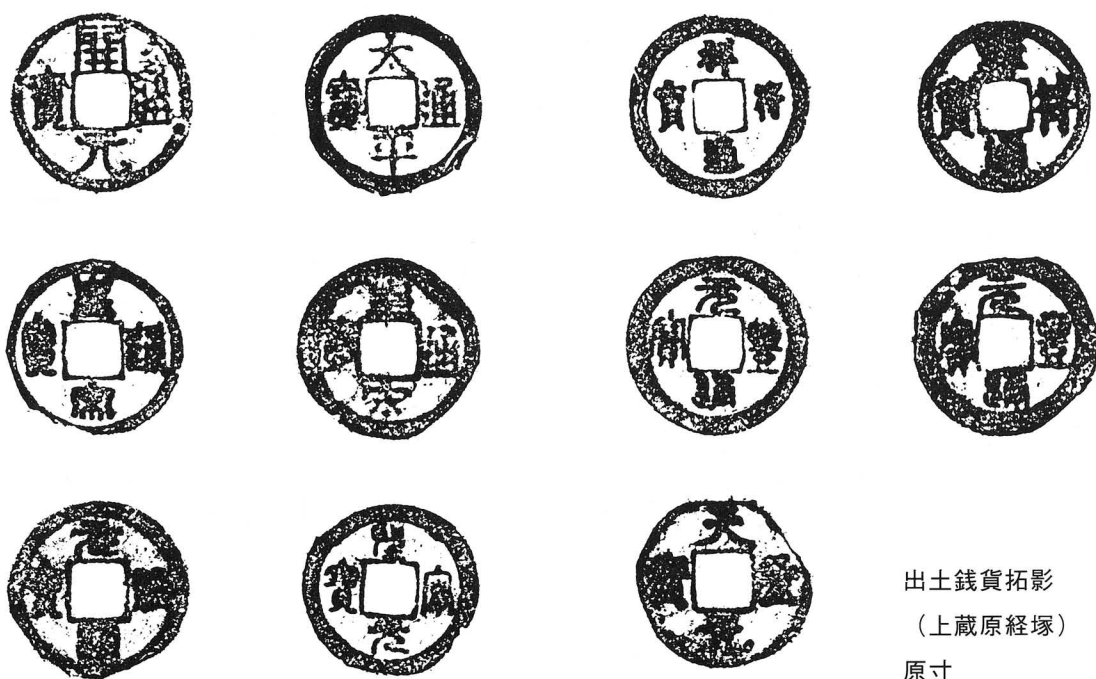
- 1) 赤星直忠・山本寿々雄「山梨県北巨摩郡高根村出土の葡萄唐草文のある経筒について」『県立富士国立公園博物館研究報告三』 1960
- 2) 関 秀夫『経塚遺物の紀年銘文集成』『東京国立博物館紀要』第15号 1980
- 3) 田代 孝「七覚山円楽寺の経筒と廻国納経」『山梨考古学論集Ⅰ』 1986
- 4) 飯島 進「甲斐国北巨摩郡双葉町塔の越出土の経筒」『甲斐考古Ⅰ』 1966
- 5) 三宅敏之「塔の越経塚－廻国納経に伴う一例として－」『甲斐考古』5－2 1968
- 6) 註3)に同じ。



円筒形経筒実測図 拓影（上蔵原経塚）



円筒形経筒（上蔵原経筒）



出土銭貨拓影
（上蔵原経塚）
原寸



六角形經筒（塔の越經塚）



円筒形經筒（塔の越經塚）



六角形經筒（円楽寺）



円筒形經筒（大六塚）